

木田宏と教科書「民主主義上・下」について ～オーラルヒストリー等の木田教育資料から～

Kida Hiroshi and *Democracy* - Excerpts From His Oral History -

*1

*2

*3

*4

谷口 知司／三宅 茜巳／興戸 律子／有菌 格

終戦直後文部省は、占領軍総司令部のもとで戦時下教育の一掃に力を注いでいた。占領軍総司令部は、アメリカの教育専門家をスタッフとしてその目的のために民間情報教育局（The Civil Information and Education Section:略称CIE）を置いた。

木田先生は、昭和21年に文部省に入省された。この時期に若手文部官僚として教科書局調査課に在籍し、CIEスタッフとともに社会科特別教科書『民主主義(上)(下)』の編集に係わった。この教科書は昭和23年から24年にかけて発行され、昭和28年頃まで使われ、戦後の民主主義教育に大きな役割を果たした。

本稿では、木田宏先生の二編のオーラルヒストリーをもとに、木田先生と教科書「民主主義(上)(下)」との係わりについて、執筆の経緯、教科書に漫画を掲載したこと、執筆者について、大江健三郎のこと、共産主義の取り扱いの各項目で考察した。

<キーワード>

木田宏, 教科書民主主義, オーラルヒストリー, 木田教育資料

1. はじめに

文部省著作教科書『民主主義』¹⁾はその(上)が1948年(昭和23年)10月30日、(下)が1949年(昭和24年)8月26日に教育図書株式会社から発行され、中学・高校の社会科特別教科書として昭和28年頃まで

使われた。

木田宏がオーラルヒストリーで、教科書『民主主義(上)(下)』について語った内容は(1)執筆の経緯(2)教科書に漫画を掲載したこと(3)執筆者について(4)大江健三郎のこと(5)共産主義の取り扱いの5点である。本稿ではこの5点について、「木田宏教育資料1～昭和20年代初頭～」²⁾(以下資料1と記す)及び「木田宏オーラルヒストリーと所蔵資料」³⁾(以下資料2と記す)から抜粋し掲載するとともに、若干の解説を付し、木田と教科書『民主主義』との係わりについて考察する。

2. 執筆の経緯

(資料1)

《民主主義の方は、これは戦後の日本改革の根本にわたることだから、本格的にちゃんと執筆者を動員

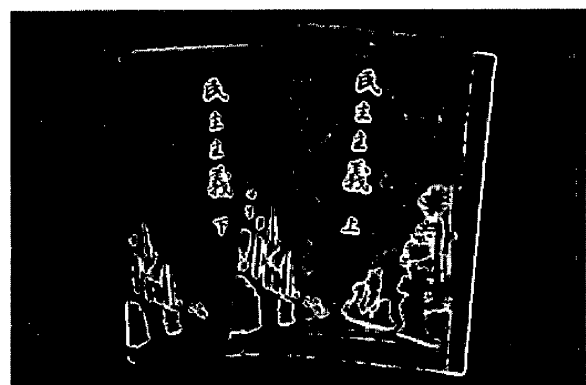


図1 民主主義(上)(下)

*1 TANIGUCHI, Tomoji, *2 MIYAKE, Akemi: 岐阜女子大学 (〒501-2592 岐阜市太郎丸80)

*3 OKIDO, Ritsuko: 岐阜大学 (〒501-1193 岐阜市柳戸1-1)

*4 ARIZONO, Itaru: 星槎大学 (〒075-0163 北海道芦別市緑泉町5-14)

して書きましようということに動いたわけです。たまたまそのときに教科書局というのは、庶務課と第1編集課と第2編集課という3課だった。それにもう一つ調査課というのができておりましたが、このころは割に気軽に課をつくったりつぶしたりしていますから、教科書局というのは、私が入ったころは庶務課、第1編集課、第2編集課と3課だったと思いますが、第1編集課というのは人文で、第2編集課というのが自然科学の関係の教科書をつくっておったと思います。

それが昭和21年の3月には調査課が加わっていて、そこへ青木誠四郎先生という人が入ってきたんですね。調査課というのが、その次の昭和21年12月4日には教材研究課ということに変わっています。この青木誠四郎先生というのが、戦後のカリキュラム改革の基本線をおつくりになったなというふうに僕は思っているんです。》

(資料2)

《当時の教科書局は、従来の国定の教科書は駄目になったわけで、「早く次の教科書をつくれ」というような時でした。第1編集課、第2編集課という二つの課がありまして、それぞれ人文系と理科系との教科書を総動員で書き直しておられたわけです。そこへね、降って湧いたのが「憲法の話」と「民主主義」という注文です。「民主主義というのは何か」というようなことがわかるようにせんか」という話がポイと出てきたわけですね。それから、「新しい憲法が出来るから、これは憲法が出来た機会に国民的に理解を広めなきゃいかんから、その解説書を」ということになった。何もしないのは私だけなんですから。そこにこういう、仕事ができた。そして、図書監修官でも何でもないところへ、「あいつ、法学士だからやらせろ」という話になってきたわけです。皆さん、教科別には忙しいんだから、もったもなんですね。

それで、一方では社会科の成立過程という本にありますように、司令部に呼びつけられては、歴史とか地理とかという教科じゃないんだ、社会科という新しい

教科を用意するんだとやってるわけでしょ。みんな忙しいので、今の二つの仕事が私に降りかかってきた。それを受けたのが、調査課長をやった青木誠四郎さんの部屋でした。児童心理、青年心理をやってらした心理学の青木さんって方がいらっしやいました。

その方が調査課長をやっておられて、それで、この方は司令部と出入りしながら比較的向こうの担当者ともコミュニケーションがよくできて、信頼を得て仕事しておられたんです。それから、西村さんという人は、有光さんが次官になられた時に、有光さんの学友ということで、医科歯科の専門学校から英語の先生であった西村さんを引っ張ってこられて、難しい話で司令部へ行く時には、私どもも英語がどうにもならんものですからね、助けて貰いました。深井さんという名前が出てくるのは、外務省から来られたわれわれよりもちょっと先輩の外交官なんです。英語のものすごくできる方でした。それで、多少、政策的な話の時には一緒にくっついて行ってもらった。

それで、西村さんが『民主主義』という本をつくらんか」という話を取り次いできたわけですね。結局、私と深井さんしか使える人がいないというので、西村さんと深井さんと私と。それから青木さんは調査課長をやってらして、これはカリキュラム全体の流れということについて調査研究という立場で新しい教育課程の編成をずっとフォローしてらした。》

『民主主義(上)(下)』は、前年に発行された「あたらしい憲法のはなし」と同様、1946年秋にCIE教育課からその作成が要請されたのを受けて作成された。

CIE側の担当者CIE教育課のHoward Bellである。ベルの専門は政治教育であった。CIEでの所属の記録は1946年11月から1949年7月までのものが確認でき所属部署はCurriculum&Textbooks Unitであったが、後にEducation Specialist UnitのSocial Sciencesの所属となる⁴⁾。一方文部省側の担当部署は、教科書局に昭和21年3月から加わった調査課であった。担当は調査課長の西村巖と調査課員の深井龍雄と木田宏があたった。

3. 教科書に漫画を掲載したこと

(資料1)

《教科書に初めて漫画を入れることにしました。その新しい憲法の話の漫画は、手塚治虫だと思いましたが、国定教科書の場合には、執筆者の名前を全部表へ出さないことになっておるものですから、日本側にはどなたが書いたということは残らないんですね。みんな消えてしまっております。

それから『民主主義』上・下は、横山フク(隆一)ちゃんと清水昆と手塚治虫の3人に手伝ってもらったと。(中略)そして、しかもそこへ書き込んだのがこの漫画なんです。何のこともわからない漫画もありますよ。けども、持っていったベルという男がね、君なあこれ筋としてはよく書いてもらったと。立派にできたけどね、やっぱり難しいやと。だから、中学や高校の子供に読ませるのには、アメリカの教科書ならば漫画があると、こう言うんです。漫画があるって。それどんなのだと言って見せてもらったわけです。そうしたら、本を持ってきて、いろいろとアメリカ式の漫画が書いてあるんですね。なるほど、私もちょっと考えましてね、いや、息抜きに少し漫画があっても悪くないなと思ったものですから、それまで、恐らく教科書には漫画というものを書いたことはなかったんじゃないかと思うんですけども、漫画を入れました。で、頼みに行っただす。横山フクちゃんの家は鎌倉まで行きましたね、こういう本といたって、表題を見せて若干の文章を読んでもらうほかないんですけれども、清水昆は、新聞社に行ったかな、手塚治虫と。それで、漫画を書いてもらったんです。漫画書いてもらおうと、どうせ見せに行かなきゃいかん。そうしたら、おもしろかったのは、「あれ、木田くん、これ完成しとるんかねこの絵は」と、こう言うわけですよ。それは、清水昆だって筆で、ぱぱぱとこう書いておもしろいけれども、これでもう終わつとるのかと言うから、

そうだと言ったら、そうかねえと一生懸命になってベルさんがアメリカの教科書を見せてくれたわけです。そうすると、アメリカの教科書はみんな塗りつぶしてありますなあ、漫画も。線だけの漫画というのはないんだよね。ああ、やはり違うもんやなあと思いましたが、これをつくるときには、執筆者選びと漫画で苦労しました。けども、出てからはこれが一番評判がいいですね。》

(資料2)

《ベルさんは喜んで「いいものが出来た」と上へ上げたんですね。ところが、その途中でね、「それでもな、木田君、アメリカだったらこういう理屈ばかり言うところには漫画が入るんだ」と、「一つ漫画を入れんかい」って話になって、これはもうびっくり仰天しましてね。教科書に漫画なんていうのは、未だかつて考えたことがないわけです。それで、「いや、しかし、そうか」と。「これはいくら易しく書いても、理屈だけ書いてあるよりは少し読みやすくするように漫画を入れるか」と考えて賛成し、相談してですね、横山フクちゃんと清水昆さん、そこにちょっとサインが入っておるでしょう。新聞の政治漫画を書いた人、清水昆です。

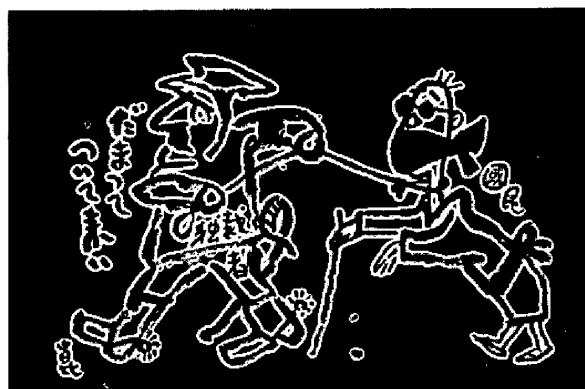


図2 挿入された漫画1

それからね、この漫画がね、これがちょっと名前が忘れちゃったんですよ。「そうだな、そんなこと言うんだったら、こっちも絵を入れてやるか」というのでね。イラストもね、これは手塚治虫かなんかの若いのに書かしたんじゃないかと思うんですけどね。文部省で出した出版物で初めて漫画を入れたんです。その意

味でも、これ、ちょっと歴史的な事件だったんです。

それで、特に清水昆の漫画なんてのは、相手にね、「この漫画でいいか」と言って見せたらね、「うん、ちょっと面白いね」と、こう言って、「ところで、木田。これはこれでもう完了しとるのか」と、こう言うわけですよ。確かに、あのスーツスーツ、スーツスーツと墨でね、線だけで描いた絵がね、それは未完成じゃないかという…(中略)…ええ。アメリカの漫画はね、全部、そういえばね、「おい、ちゃんとうふうに、絵というものはこういうふうになつとるものだ」って、見せてくれるわけですね。だから、それは「いやいや、これはこれでもう完成品なんだ」と。そしたら、「はあ、そういうもんか」って。そういうやり取りがありましたね。》

『民主主義(上)』には20枚、『民主主義(下)』には9枚の漫画が挿入されている。漫画の作者についての記録は残っていないが、木田の証言によってこれらが横山隆一、清水昆、手塚治虫の3人によるものであること、また木田が自宅や勤務先などを訪ね直接依頼したことなどが解る。また一部の漫画はサインでその作者が特定できるものもある。文部省の出版物に漫画を入れるということはまさしく“歴史的な事件”と言えることであったが、漫画を教科書に入れることにしたのはベルの示唆によるものであったことがわかる。また、ベルが木田の依頼によってアメリカの教科書を示すなど積極的であったこと、日本人漫画家が描いた漫画とアメリカの漫画との違いにベルが困惑している様子など木田との当時のやり取りがはっきりと分る。

4. 大江健三郎について

(資料1)

《ですから、これは教科書を扱ったことのないのがいきなり飛び込んで与えられた仕事で、まあまあ、なんとかこれなら読めるだろうと作業をしたものです。ところが、その教科書を読んで大江健三郎が「大変、民主的になった」と言って、どこかにこの本のことを書

いてあるものですから、びっくりしましてね。(中略)

ええ。大江健三郎はね。それで、天皇制は民主的でないから、文化勲章をもらわんと、こういう発想になっているわけ。(中略)

文化勲章とは関係ないけれども、その大江健三郎が、『民主主義』という本に「大変、目から鱗が落ちるような思いをした」というのがこれの片山さんの本の中に書いてあったものですから、私はびっくりしましてね。これはえらいものをつくったなと思って。》

ノーベル文学賞作家の大江健三郎はそのエッセー「戦後世代と憲法」の中で教科書『民主主義』について言及し⁵⁾、また、近年では2004年3月17日放送のテレビ朝日のニュースステーションの特集「作家大江健三郎さんと憲法を考える」においても『あたらしい憲法のはなし』と『民主主義』について言及している。以下は前者のエッセーの関連部分の抜粋である。

『ぼくが谷間の村の新制中学に、最初の一年生として入学した年の五月、新しい憲法が、施行された。新制中学には、修身の時間がなかった。そして、ぼくら中学生の実感としては、そのかわりに、新しい憲法の時間があったのだ。ぼくは上下二冊の『民主主義』というタイトルの教科書が、ぼくの頭にうえつけた、熱い感情を思い出す。…(中略)…戦争から帰ってきたばかりの若い教師たちは、いわば敬虔にそれを教え、ぼくら生徒は緊張してそれを学んだ。ぼくはいま、《主権在民》という思想や、《戦争放棄》という約束が、自分の日常生活のもっとも基本的なモラルであることを感じるが、そのももとの端緒は、新制中学の新しい憲法の時間にあつたのだ。』(「戦後世代と憲法」から引用)

5. 執筆者について

(資料1)

《『民主主義(上)(下)』というのは、かなりかつちりした中身のものですから、相当気合いを入れて執

筆者を考え、いろんな方をお願いをして 10 何章ぐらいになったのでしょうか、…(中略)…上だけで 11 章ありますね。下が 12～17 章あります。これはかなりがっちりした内容のものにそれぞれなっております。これをつくるために、ベルさんという、どこの大学の先生だか知りませんが、社会科学の先生がやってきまして、ベルさんと対応でこれをつくりましたが、一番私が参ったのが宮沢俊義さんの担当部分です。鶴飼信成だとか土屋清とかまあそれぞれの、これは私、今思いつきでものを言いましたけれども、戦後の民主主義その他解説をされた、研究をされた研究者の方もアメリカへ行って、何章はだれが書いたとみんなちゃんとチェックしてありますから、ああやつぱりアメリカへ行った方が勉強ができるんだなと思っておりますが、そのときに、こういう人に頼んだかということは、みんなわかると思うんです。それで、最初は宮沢俊義さんに一番最初の書き出しのところをですねお願いしたんです。「民主主義の本質」という。それから第 2 章が「民主主義の発達」、第 3 章が「民主主義の諸制度」「選挙権」「多数決」「目ざめた有権者」「政治と国民」「社会生活における民主主義」と、こういう順番で並んでいまして、「民主主義の本質」は、この柱から申しますと、民主主義の根本精神、下から上への権威、民主主義の国民生活、自由と平等、民主主義の幅の広さと、こういうそれぞれの柱をベルさんと相談しながら、まあ、これでいいかと言いながら、今度はこっちで西村巖さんが調査課長で、英語の先生でしたこの人は、医科歯科(東京医科歯科大学)から有光(次郎)さんの通訳に連れてこられた人、調査課長で、青木さんの次の課長さんになっていただいて、この本のかじ取りをしてもらったんです。

人を割り振っていくときに、この第 1 章の「民主主義の本質」は、宮沢俊義先生をお願いをしたわけです。そして私は、いろんな大先生がそれぞれの章をお書きになったやつをもらって、そして翻訳に回して、向こうと折衝をするという役なんですね。で参ったのは、宮沢さんのものなのです。これはね、こういう趣旨の

本ですからと申し上げたのに、全然、中身がかたいんですよ。とても一般の読み物にならない。ところが何ていったって大先生ですからね。宮沢さんにこれ書き直してくれというわけにはいかないので、外すのに困っちゃったわけです。そして、尾高朝雄さんが、これはまた私の大好きな『国家構造論』(岩波書店 1936)とかですね、『実定法秩序論』(岩波書店 1942)とかという、法律学の先生としては本当にすばらしいなあと思う本をお書きになった方が、京城(帝国大学)を離れて東大に来ておられた。そして、ひょっと見たらね、宮沢さんよりもちょっと先輩なんだなあ尾高さんの方が、これで助かったなあと思って、それで尾高さんのところへ行きましてね、実はかくかくしかじかだと、こうやって宮沢さんに書いてもらって、この第 1 章に一番困ると。宮沢さんのこれはね、ちょっとほかとバランスがとれないんだと、書き方が。そうしたら、尾高さんが、わかったおれが全部引き受けてやると。これは、その意味では尾高さんが全部通して書いたんです。ほかのところは直す部分はそんなにはないんですがね、第 1 章だけは、くしゃくしゃに直って、没で、尾高さんが全文書いたわけです。で、やっそこっちもねこれなら向こうへ持っていっても恥をかかないなあというものになってこれができたんです。当時、東大の看板の大先生の本をポシャッとやっちゃったもんだから…。だけでも、ほかにどうしようもないんで、苦勞したんですが。そのことで、ようできたと言われているわけですよ。》

(資料 2)

《誰に執筆を頼むかということから問題です。私は、戦争に 3 年ほど行って、空白です。帰ってきて、東京へ入ったばかり。西村さんがだいたい頭に描いて、こういう人、こういう人、こういう人と、まあ、朝日の論説の土屋清さんのように経済の人や、名前はこれの中 3) に全部入ってます。私はもう覚えてませんが、その当時は、仕事の上じゃ知ってますけれども、誰がこの章を担当したなんていうことは表にはいっさい出さないわけですから。仕事が終わったあとは

みんな忘れてしまいました。

これは思い出が深い本なんです。最初に頼りにしたのは宮沢俊義さん。その外、いろんな立派な先生方に書いていただいた。出た原稿を集めて、もらってきて読むのは私なんです。そりゃ、ほかの人は読むわけにいかない。読むとね、大先生の原稿はどうにもならんわけですね。分担して書いてもらうから。そういう時に、図書監修官なら自分でサーッと直すでしょうね。文部省の本だから、勝手にサーッと書き直すんだと思うけれども、若い私がこの大先生の原稿を預かってきたら、どうしようもないわけ。ただ、「これでは具合が悪い」ということだけはようわかるんですよ。

それはね、一般に皆さんののは難しく書きすぎる。特に宮沢さんののは、一番中心にした人のものに一番困ったんですよ。…(中略)…偉い先生にはね、「直せ」と言えませんがな。それで、「さて困った」、「どうしたもんかいな」となって西村さんに相談をして、西村さんがいろんな人に聞きに行つて、宮沢さんの書いたものに筆入れられる人がいるかという感覚で探したんです。そして、出てきたのが尾高朝雄先生。(中略)

私のほうの立場からすると基本的な問題はね、読み物にしてもらわないことにはね。学説を闘わせてもらっても困るということなんです。だから、そうかといつてね、宮沢先生の書いたものをね、「これ、子供用に直してくれ」というわけにいかないんです。だから、もうお手上げになっちゃったんです。

ところが、そのいろんな意味でね、年格好とかいろんなキャリアから言つて「尾高さんに、それじゃ頼め」ということになって、尾高さんにスイッチしたわけですね。そちらの学問的な喧嘩はどうであれ。もうちょっと通俗的に書いてもらわなければ、わかりやすく。そこで尾高さんにスイッチをした。(中略)

だけど、なぜ、宮沢さんから尾高さんに変えたなんという説明は向こうにはできませんよね。これはやっぱりわれわれの中で持つてなきゃ。だから、表には出せる話じゃない。それで、宮沢さんがどんなご不満であったかどうかとも、それはちょっとわかりませんけれどもね。偉い人の書かれたものにはね、そういう難し

さがあるわけですよ。もうちょっとわかるように、子供向きに書いてくださいという、「馬鹿にするな」なんて言われそうなのが大事になるものですからね。そういう意味では、尾高さんに全部筆入れてもらったんです、読みやすく。(中略)

ええ。だからね、各章みんな分担者が違うのに、スーッと読めるものになってます。僕はこれは非常にその意味では成功した本だと思つてます。》

教科書『民主主義』の執筆者の陣容は当初西村巖が中心となつて構想したことが木田の証言から分る⁶⁾。また、1946年12月時点での執筆メンバー(委員会メンバー)はアメリカ側の資料では13名⁷⁾であるが、その中から宮沢俊義と Setsu Tanino が抜け、後に尾高朝雄が編集責任として参画している。

ここで極めて興味深くまた明らかなことは第一章「民主主義の本質」の執筆が宮沢俊義に依頼され、その草稿がすでに出来上がつていたことである。しかしながらその草稿が「中身がかたい」「とても一般の読み物にならない」「これでは具合が悪い」「大先生のお説であつてね、こんなもの教科書にはならない」(木田)などの理由から、草稿を取りまとめ翻訳に回して、アメリカ側と折衝をする立場で、内容を読むことができた木田が、西村に相談し人選の上、東京帝国大学で宮沢の2年先輩であつた尾高にその処理を委ねられたということである。その後1948年2月以降尾高は「単なる編集に留まらず、各執筆者の書きあげた草稿を手直ししたり、大きく書き直したりする仕事まで引き受けて進めることになる」⁸⁾のである。

6. 共産主義の取り扱い

(資料2)

《ああ。それはもうね、かなり言葉遣いとかやり取りというのはあつたと思つてますけどね、記憶してありませんわ。「もうちょっと、ここはこう」というようなことはあると思うけれども、まあ、出来たあと、マルキシズムだったかな、なんかの労働問題のところ赤旗

を持っている漫画が入ってましたね。左の連中からクレームが付いた。「なんだ」って、「これ、民主主義って言ってるけれども」。

そうそう、これね。過激思想家、こうなつては困るという、組合がね。これは出たあと、クレームが付きまして。このへんのボルシェビキとかなんとかということ、これは、尾高先生がきちんと事柄を理解してらしたから、どういう表現にするとかなんとかというのはかなり尾高先生が用心をして、ここは筆を入れられたと思います。それを持っていって、いちいち折衝するのは私でしたけれどもね。だけでも、片一方では共産党がワァワァ言つとる時期ですし、文部省の出版物として出す以上は極端な表現を取るわけにいかんですから、表現は気をつけました。ボルシェビキというのはこういうものだというのは、尾高さんの非常に強い政治的な信念でこれは書かれています。それで、こういう絵を清水昆さんが描いたんですね、この絵を。

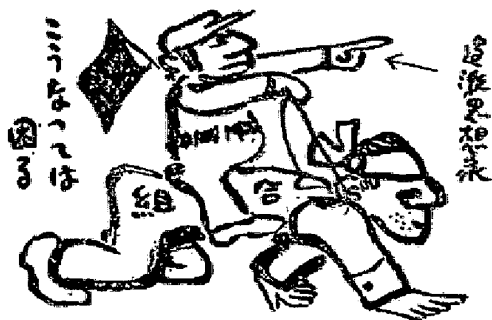


図3. 挿入された漫画2

そしたら、「なんだ、この野郎。共産党退治の本じゃないか」と、こう言って。それに対して「いやいや、これは『赤旗』じゃなくて『黒旗』だ」って言って。》

アメリカ側の資料を基にした片山の調査で「深井、木田を通して、ソビエトに関する記述をもっとソフトにした方が良くはないか」という文部省側の意向が、7月22日の会議で、ベルに伝えられている。」⁹⁾ ことが明らかにされている。連合国の一つであるソ連への配慮ではないかと考えられているが、このことについては木田は発言を控えている。

また、アメリカの資料によるとここで述べられている第11章「民主主義と独裁主義」は1948年1月10

日現在で大河内一男によって草稿が提出済みであることが判明しているが¹⁰⁾、尾高朝雄がアメリカ側の意向や当時の社会情勢に配慮し大幅な修正をしていたことがわかる。

7. おわりに

木田先生は『民主主義(上)』が発刊された後、昭和24年3月に望月哲太郎に引き継ぎ、千葉県庁に出向される。このことによって木田先生が手掛けられた仕事は一応のピリオドをうつことになった。木田先生が文部省教科書局の事務官として任官され、千葉に出向されるまでの期間は3年足らずという短い期間ではあったが、その最初の仕事として『民主主義(上)(下)』の編集という歴史的な偉業をなしとげられたのである。

なお、最後になりましたが、本稿が成立したのは、木田先生がオーラルヒストリーとして貴重な歴史的証言を残して頂いたおかげであり、また木田宏オーラルヒストリーの制作に係わられた方々の多くの労によっている。改めて木田先生ならびに関係各位に感謝の意を表します。

注

- 1) CIEからの申し入れでは(Primer of Democracy)が書名として提示されていた。
- 2) 「木田宏教育資料1～昭和20年代初期～」岐阜大学教育学部附属カリキュラム開発研究センター、1997年、1頁～38頁
- 3) 「木田宏オーラルヒストリーと所蔵資料」日本教育情報学会・岐阜女子大学文化情報研究センター、2006年、2頁～68頁
- 4) 佐藤秀夫代表「連合国軍最高指令官民間情報教育局の人事と機構」国立教育研究所、1984年、47頁～75頁

なお、ベルについては『民主主義』を作成するために日本にやってきたという木田の証言がある。「木田宏オーラルヒストリー(C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト)政策研究大学院大学、

2003年, 35頁および53頁

ただ, ベルは同時に『新しい憲法のはなし』も担当した。なお, ベルについては「どこかの大学の先生」(木田)であるとの証言があるが確認はできなかった。

また, 後に尾高朝雄はベルについて, 「ベル博士は政治教育の専門家で, その方面のすぐれた著書もある。・・・ベルさんは, ロッキー山脈の高原地帯に位するコロラド州の人で, フロンティア・マンらしい野性味と, 深いヒューマニスティックな人間愛とを身につけた, 最もアメリカ人らしいアメリカ人である。…この本の最後の校閲が終わった今年の夏, ベルさんはこの仕事に心身を打ち込んだあまり, 健康を害して, しかし, この本の完成に近づいた喜びを胸にいだきつつ, アメリカに帰った。」と記している。

(尾高朝雄「教科書『民主主義』について」, 「教育現実」, 第1巻第5号, 1949年, 34頁)

- 5) 大江健三郎「厳粛なる綱渡り(上)」新潮社, 1975年, 192頁～199頁
- 6) 政策研究大学院大学のオーラルヒストリー(上掲書)においても木田は「西村巖さんと相談して, 西村さんが『こういう人を集めて, 書いてもらおう』と」という証言をしている。
- 7) 当初(1946年12月現在)の『民主主義』執筆メンバーは次の13人である。

Mr. Tsurutaro ADACHI, Mr. Takeshi HARA

Mr. Shigeru HAYASHI, Mr. Mataichi KIDO

Mr. Fumio MADARAME

Mr. Takizo MATSUMOTO

Mr. Toshiyoshi MIYAZAWA, Mrs. Setsu TANINO

Mr. Kazuo OKOCHI, Mr. Kiyoshi TSUCHIYA

Mr. Nobushige UGAI

Miss Tamiko YAMAMURO, Mr. Tatsuo FUKAI

また, 1948年1月10日現在では

- 1 民主主義の本質(尾高) 2 民主主義の発達(林)
- 3 民主主義の諸制度(鶴飼) 4 選挙権(尾高) 5 目覚めた有権者(松本) 6 多数決(尾高) 7 政治と国

民(安達) 8 民主主義と労働組合(大河内) 9 社会生活における民主主義(Kido) 10 経済生活における民主主義(土屋) 11 民主主義と独裁主義(大河内) 12 民主主義のもたらすもの(記載なし) 13 日本における民主主義の歴史(林) 14 新憲法に現れた民主主義(鶴飼) 15 今日の日本における民主主義(記載なし) 16 民主主義の学び方(班目) 17 日本の婦人の新しい責任(山室) 18 国際生活における民主主義(深井)となっている。なお, 後に17章の構成になる。

片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房, 平成5年, 886頁～888頁から引用

- 8) 片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房, 平成5年, 887頁

また, 尾高はこの経緯について, 「最初はこの仕事に全く関与せず, 途中で, 二三の章を書くことになっていた人に支障ができたため, 代わってそれを書き, ついに文部省にせがまれて, 全体を自分の筆で書き改めたり, 書き流したりするということまで引き受けてしまった」と述べている。(尾高朝雄前掲論文30頁)

- 9) 片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房, 平成5年, 891頁

- 10) 片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房, 平成5年, 891頁

また, 木田は政策研究大学院大学のオーラルヒストリー(上掲書)において「最初に原稿を依頼した方の文章は, 参考になったということですか」との問いに「いや, ほとんど生きています。宮沢さんのところだけがムチャムチャに変わっているんです。これはちょっと願ひ下げで, 書き直してもらったからね。」と発言している。